

出会いは食パンをくわえて

総合教育科 教授 和田 茂俊

時間になって物質工学科の教室に入ると、学生たちがいっせいにこちらを見る。どこか不穏な気配が漂う。いつもと様子が違うので、彼らはまた何かを企んでいるのではないか、と思う瞬間、食パンを口にくわえた女子が一人、こちらに小走りで近づいてくる。と、もう一人、やはり食パンをくわえた女子学生が後に続く。ときおりとんでもなくおもしろいことをしてくれる*さんと、こういう悪巧みにはあまり加わらないと見ていた*さんの二人である。男子学生たちが大笑いしている。なんだろう、これ。パンを口からぶら下げたまま、一人が私の肩にぶつかってくる。ああ、そうか、これは先週の森鷗外の授業のあれだ。「恋愛物語においては、恋の欲望がどのように生まれるかが物語の性質を見きわめる重要なポイントの一つです。テレビドラマや漫画、アニメーションなどの恋愛物語では、パンをくわえて走る女の子と道で衝突して恋愛が始まるというのがお決まりですが、実際にそういう女子を見たことはないですね。本当にそんな光景があるのなら、一度くらい見てみたいものですが、食パンをくわえたまま走っている女性には、あいにく一度も出会ったことがありません。」授業で私がもらった一言に対し、二人はわざわざ食パンを準備した上で、「男女の出会いの定番」を実践してみせてくれたのである。

ここ和歌山高専ではこうした小さな事件が次々に学生らによって引き起こされながら、いたって平和な日々が展開されている。知能機械工学、電気情報工学、物質工学、環境都市工学という四つの学科を備えた高専であるが、そのほかに総合教育科というマイナーな部門がある。この総合教育科は四つの専門学科学生に対し、国語、数学、理科、社会、外国語、といった基礎教育を行う部門であり、所属学生はいないが、それぞれの教科を教える教員がいる。基礎科目系の教員は、高専ではほとんど注目されない（「え、高専にも国語ってあるんですか？」）が、各教員は独自のテーマのもとに地味ながらも研究を続けている。このたび『紀伊民報』の紙面をお借りして、それぞれの研究や関心事について、教科ごとにリレー形式で紹介させていただくことになった。今回から始まる和高専リレー連載をお楽しみいただければ幸いである。

（『紀伊民報』平成二八年四月一九日）